アサヒ飲料

〝香り〟にフォーカスした「和紅茶」「リフレッシュ」ニーズに応える

インタビュー

アサヒ飲料は今年4月、国産茶葉を100％使用した「和紅茶 無糖ストレート」を発売。上品な「香り」にフォーカスした無糖紅茶飲料で、発売後は手ごたえがありながらも見えてきた課題もあるという。それでも「ニーズに合致した確かな製品力を持った同品を大切に育成する方針だ」というマーケティング本部マーケティング二部お茶・水グループの星野浩孝氏（写真）にこだわりや今後について聞いた。

（聞き手 柴田明子）

――開発背景

ポートフォリオを強化すべく、紅茶飲料の商品開発を検討していた。「無糖」といったニーズを踏まえながら、まだ世の中に出ていない様々なコンセプトの製品を模索していたところ、鹿児島県産の緑茶葉を発酵させた紅茶葉に出会った。とても上品な「香り」で、これは世の中の人に支持されると確信し商品化に着手した。

近年、お茶に「香り」を求める消費者が増えている。我々の調査によると、紅茶に「止渇性」や「食事との相性」を求める一方で、「香りのよさ」への期待が年々増加傾向にあり、特にコロナ禍ではこの流れが顕著だ。

将来への不安やデジタルストレスといった閉塞感の中で、リフレッシュする機会が求められている。人と会ってストレスを解消することが減ったコロナ禍以降、「普段飲む飲料でリフレッシュをしたい」というニーズが顕在化。これに応えるべく、香高い鹿児島産の紅茶葉で商品化を進めることにした。

――「和紅茶」のこだわり

特長である〝香高さ〟を最大限に引き出したことだ。

現地の農家を訪問し、国産紅茶葉の確保とともに一から理想とする紅茶葉をつくりあげた。味づくりでは、最高位茶師である「茶師十段」の六代目東 源兵衛（ひがし げんべい）氏監修のもと、「上品な味わい」を追求。鹿児島県産茶葉を100％使用し、絶妙なうま味と渋みで、前者が引き立つバランスで、上品な香りと味わい深いコクで心が和むテイストを目指した。

製茶の段階からこだわることで、香りが特長の「和紅茶」をつくりあげることができたと思っている。

――発売後の動きと今後の取り組みについて

4月5日の発売後は店頭回転が好調で、ニーズに合致した製品力を確認することができた。当初の目論見通り魅力が伝わったと手ごたえを感じたものの、競合環境が激しい中で、この流れを維持するための課題も見えてきた。

そこで、商品の魅力をより多くの方に伝えられるよう9月13日からはパッケージをリニューアル。赤と白を基調としたパッケージはそのままに、新たに茶葉をイメージしたイラストをあしらい、上部に「香り立つ」と記すことで評価をいただいている〝「和紅茶」の上品な香り〟を改めて訴求している。

あわせて、第2弾商品として「和紅茶 無糖ストレート ファーストリーフ」を期間限定発売。4月下旬から5月上旬に収穫するその年の最初の新芽を摘み取って作られた一番茶を使用したもので、苦みが少なく、フレッシュで澄んだ香りが特長。第1弾と同様に東源兵衛氏が中味を監修している。

いずれも採用されたSMではとても動きが良く、ポジティブな声も寄せられている。

今後は「和紅茶の日」（11月10日）に合わせた情報発信などで多くの方に試してもらえるような活動を展開していきたい。売り場では、「十六茶」をはじめとするアサヒ飲料の定番ブランドとともに提案を強化する。

話題を作って面を増やすことが今の課題だが、地道な営業活動を重ねることで確実に実績に結び付けていきたい。

全清飲、物流課題改善への取り組みを開始

全国清涼飲料連合会は13日、清涼飲料業界におけるトラック輸送・運転者が現在直面する状況や「2024年問題」と呼ばれる物流課題を踏まえ、今後も安定的に商品供給を行うため、物流事業者の負担軽減などの物流改善への取り組みを開始すると発表した。

トラック輸送・運転者を取り巻く環境は「人手不足」「高齢化」「長時間労働」「低賃金」「トラック調達コストの上昇」「荷待ちにおける長時間待機」「荷卸しや付帯作業の増加」などにより非常に厳しく、運転者不足が深刻化。さらに2024年には労働基準法の時間外労働上限規制が適用されることで、この状況はさらに深刻化すると予想されている。

清涼飲料業界は、加工食品の中でも最大級の物量を全国に配送、輸送ルートも多岐にわたること、加えて災害時は生活のライフラインとして緊急配送も必要となるなどの特徴がある。

生活者にとって必要不可欠な清涼飲料水を、今後も安定的に取引先に配送するために、ドライバーの長時間労働につながる配送先での「長時間待機の削減」や「付帯作業の改善」にむけ、関連業種などとともに、改善に向けて取り組む。物流でのDX推進など具体的施策の検討も開始。

物流の改善は、CO_2排出抑制、省エネ化の観点でも非常に重要となる中、業界で取り組む「輸送ルートの効率化」「共同配送」「モーダルシフト」など今後も推進。

「物流課題への取り組みは、ライフスタイルの変化、宅配需要の増加などに伴う物量拡大への対応に加え、カーボンニュートラルや省エネへの取り組みなど、新たに生じる様々な物流課題への対応が今後もますます重要になる。清涼飲料業界では今後も、国交省や経産省など関係省庁や関連業界・団体と連携しながら、サステナブルな物流の仕組み作りに取り組んでいく」（全清飲）。